

メディアと男のセクシュアリティ

八月の中ごろ、ある新聞のQ&Aのコーナーに、次のような質問が載っていた。

「高校一年の息子がインターネットでアダルト向けホームページを見ているが、どうすればいいでしょうか」

その質問に対して、大学講師の回答者は、おおむね次のように答えていた。

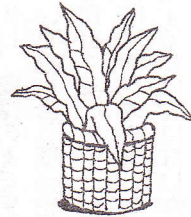
「息子さんの年代からいって当然の関心を示しただけで、放っておいてもいすれさめるでしょうから、過度の心配は不要です」

ほんとうにそうだろうか。十年前、二十年前の活字や静止画による性情報ならともかく、今のアダルト画像の影響はもっと強力なものではないだろうか。

話は変わるが、その半月ほど前、日本の高齢者福祉の現状を聞く会合に参加しており、元放送記者で現在はフリーのジャーナリストの男性講師が、「介護される側ももっと生き生きとしなくては」というようなことの例として、「七十代の男性が、若い女性のヘルパーが来る時間を見計らってポルノビデオをかける」という話を、ほほえましいことであるかのように紹介した。

せいかつエッセー

吉田清彦



それを聞いて私は、話の途中だった

なっていました。

青年であれ、高齢者であれ、性的な興味を持つこと自体を私は否定するつもりはない。だが、そのこととアダルト画像を見ることがイコールではないし、ましてや、いくら信頼関係ができていとはいえ、恋人でもない人にポルノビデオを見せることはまったく別のものではないだろうか。

ちなみに、私の友人の女性は「もし自分の息子がそういうものを見ていたら、『女性の人格を侮辱するようなものを平気で見るような、そういう子どもにお前を育てた覚えはない』と叱りつける」と言っていた。

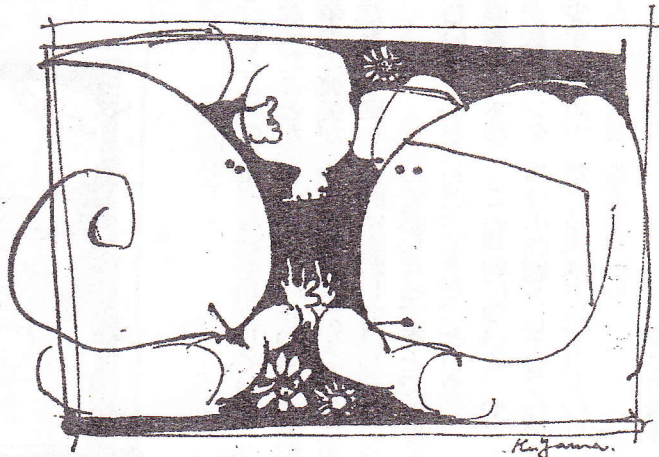
それなのに、社会的な影響力を持つ男性の多くが、まだ、「そういうことは男として当然」というようなことを平気で口にしつづけていることが、私には不思議でならない。

それを聞いて私は、話の途中だった。がたまたまに「それはセクハラですよ」と口にして、その講師と言い争いに

そして、日曜のお昼のテレビ番組では、衆人環視の前で若い女性が水着に着替えるというようなものが放映されるし、夜の時間帯では若者に人気の番組でセクハラまがいの行為が堂々と行われている。また、夜遅くには、音楽番組などに出演したミュージシャンがフック体験を得意げにしゃべったりもしている。

そういう番組を日常的に見ていると、男が女にエッチなことを言ったりしたりするのは当たり前だし、それを女性はいやがらずに喜んでいいる、と思うだろうし、また、「男がフックに行くのは当たり前」とも思うだろう。これではセクハラはなくならないし、痴漢やその他の性的犯罪もなくならないのではないだろうか。

今の時代においては、男のセクシュアリティ、つまり、性に関する意識や行動のあり方は、メディアによってつくられられる側面が大きいのではないかと。



<ひさしぶり> 山口勝幸

女の性や男の性を「商品化」したテレビCMや新聞広告を話の糸口に、メディアと男のセクシュアリティの問題について、みんなであれこれ話し合っていきたいと思っている。よろしかったら、ぜひどうぞ。

(三三三)「屋台村通信」発行人

九月の十三日と十四日の二日間、大